

(34) ヤマノイモ

1 主要な作型及び病害虫の発病・加害時期

普通栽培

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
栽培暦	◎											
炭疽病												
葉渋病												
褐色腐敗病												
根腐病												
アブラムシ類												
ヤマノイモコガ												

◎植え付け 収穫

2 主要病害虫別防除方法

農薬による防除については、栽培ステージ、病害虫の発生状況等に応じて、散布、灌注、土壌消毒などを行う。

なお、農薬による防除の際は、農薬登録内容や使用上の注意等を遵守して実施する。

(農林水産省農薬登録情報提供システム <https://pesticide.maff.go.jp/>)

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除
モザイク病 (JYMV)	①種いも生産ほ場では、24メッシュ（1mm）より細かい目の防虫ネットなどで被覆する。 ②無病のいもを種いもとして用いる。 ③二次感染を避けるため、発病株は発見次第除去する。 【参考事項】 他に、ソラメウルトウイルス(BBWV)、ヤマノイモエソモザイクウイルス(CYNMV)、Yam mild mosaic virus(YMMV)によるウイルス病があるが、いずれもアブラムシ類によって非永続的に伝搬する。BBWV、CYNMVはジネンジョでは発生が確認されていない。 種いもでも伝染する。
炭疽病 (<i>Gloeosporium</i>)	①急激な肥料切れを起こさないように、適度の追肥を行う。 ②肥培管理を適正にし、過繁茂にしない。 ③密植栽培を避け、風通しを良くする。 ④被害茎葉は処分する。 ⑤支柱などの資材を再度使用する場合は、消毒してから使用する。 【参考事項】 病原菌は、被害茎葉上に菌糸の形で越冬し、翌年の伝染源になる。 支柱などの資材に付着して伝染源になることも考えられる。 病斑上の黒色小粒点は分生孢子層である。分生孢子は水滴や雨水とともに飛散し、表皮や傷口から侵入して、二次伝染を繰り返す。 降雨が多いと多発する。 盛夏期は病勢が一時停滞する。 水不足や肥料切れなどで茎葉が弱ると、発生が多くなる。
葉渋病 (<i>Cylindrosporium</i>)	①連作を避ける。 ②被害茎葉は処分する。 ③支柱などの資材を再度使用する場合は、消毒してから使用する。 【参考事項】 病原菌は、孢子層や菌糸の形で被害植物について越冬、これより分生孢子を形成して伝染する。 支柱などの資材に付着して伝染源になることも考えられる。 病斑上の分生孢子が二次伝染を繰り返す。 梅雨期及び秋に降雨が多いと多発する。 高温の盛夏期には、病勢は一時停滞する。盛夏期でも冷涼で降雨が多いと、梅雨期から連続して発生し続ける。
褐色腐敗病 (<i>Fusarium</i>)	①連作を避ける。 ②種いもは健全ないもを選別して用いる。ただし、発生ほ場のいもは、たとえ健全であっても用いない。 ③種いもの切断部は、消石灰又は木灰を粉衣する。 ④多肥栽培を避ける。 ⑤排水対策を行う。 ⑥収穫時には、作物残さ、特に被害いもを処分する。 【参考事項】 病原菌は、厚膜孢子の形で長期にわたり土壌中に残存する。 連作によって土壌中の菌密度が高まり、土壌消毒をしないと年々発生が増加する。 高温を好むので、春から夏にかけて高温が続く地温が高い年に発生が多い。 冷涼な気象の年では病斑が少なく、いもの上部に病徴が多く現れる傾向がある。

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除
根腐病 (<i>Rhizoctonia</i>)	①連作を避ける。 ②種いもは、無病ほ場で生産されたものを用いる。 ③土壌pHが低いほ場は発生が多い傾向があるので、苦土石灰などでpH 6～7を目標に改良する。 ④被害残さを処分する。 ⑤深植えする。 ⑥むかごから養成した種いもは、首部に病原菌が潜在している割合が高いので、首部を除いて使用する。 【参考事項】 ニンジン、ダイコンなども侵す。 土壌中では、菌糸又は菌核を形成して生存する。 第一次伝染源は、前年の被害植物などとともに土壌中で越冬した菌核や菌糸、あるいは種いもに付着した菌核や菌糸と考えられる。 菌糸の生長は速く、特にむかごからの種いも養成栽培では、発病株から隣接株に伝染して次々に立枯れを起こす。 発病は13～28℃の広い温度範囲で起こる。 一般に高温年に被害が大きい。
アブラムシ類	①種いも生産ほ場では、24メッシュ（1mm）より細かい目の防虫ネットなどで被覆する。 【参考事項】 ウイルス病を媒介する。 ジャガイモヒゲナガアブラムシ、ワタアブラムシが主に寄生する。 新梢や葉にむらなく寄生するが、密なコロニーを形成することはないので、吸汁による直接害は少ない。 ウイルス病のまん延を防止するためには、防除の徹底が必要である。
ヤマノイモコガ	①肥培管理を適正にし、過繁茂にしない ②密植栽培を避け、風通しを良くする。 【参考事項】 越冬態は成虫と考えられている。発芽すると同時に寄生し、6～7月に発生が多くなり各態が混発するようになる。 夏は減少するが、秋に再び多くなる。 年間の発生回数は3～4回程度と考えられる。幼虫は、老熟すると葉裏や支柱ネットの糸上で、網目状のまゆを作って蛹化する。